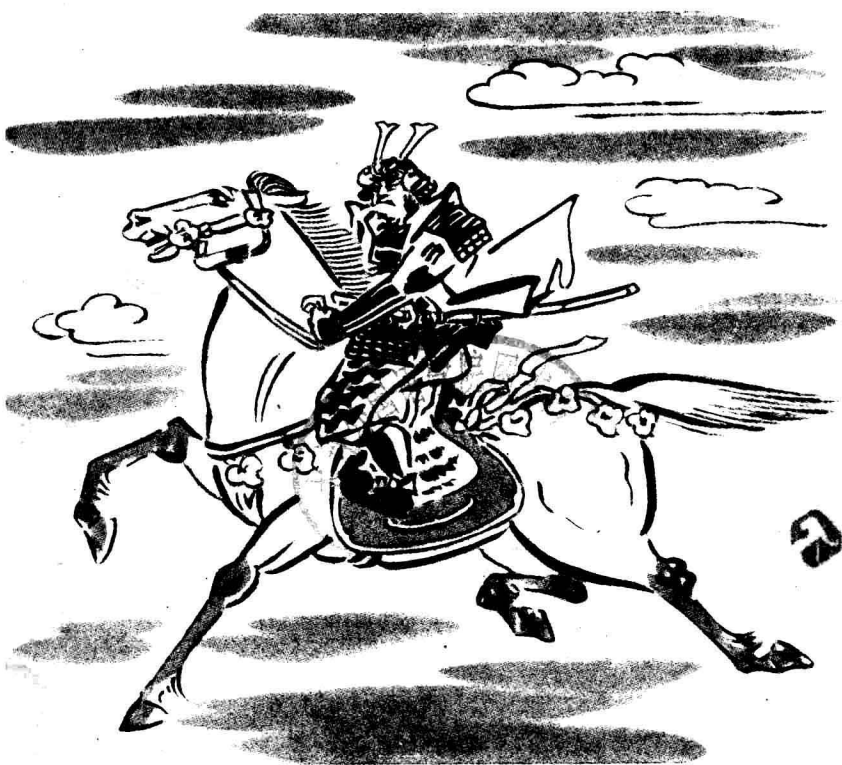


徳川 康

無相門の巻

山岡 莊八



講談社

徳川家康(10)

無門の巻

著者紹介

明治四十年新潟県生

新鷹会会員

昭和十七年野間文学奨励賞受賞
代表作「家庭の旗」「海底戦

記」「六つの悲劇」「日

本海軍の慟哭」「日蓮」

「桃源の鬼」「地霊の叫

び」「千葉周作」「徳川

家康」「織田信長」

埼玉縣立圖書館

昭和31年12月25日 第1刷発行 © ¥ 270

著者 やま 岡 莊 八

東京都文京区音羽町3-19

発行者 野間省一

東京都文京区音羽町3-19

印刷者 渋谷龍吉

東京都文京区音羽町3-19

印刷所 豊国印刷株式会社

発行所 東京都文京区 株 大日本雄弁会講談社
音羽町 3-19 会社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。(大進堂製本)

目

次

龍虎の駈引	犬山思案	出陣	防風林	残月	三河の使者	硬骨軟骨	次に吹く風
.....							
二六	二四	二三	四四	七〇	四九	二六	七

筑前旋風		一八三
長久手		二二一
勝入戦法		二三六
乱戦		二四〇
鹿と瓢		二八五
小慾大慾		三〇〇
和平の供物		三二四
茶道三略		三三五

装幀
屏繪
木下
二介
杉本
健吉

徳
川
家
康

無
相
門
の
巻

次に吹く風

一

茶屋四郎次郎は、じり／＼と照りつける炎天下を矢矧^{やがき}の大橋へ急いでいた。

うわべは徳川家の呉服調達の御用商人で、その実は京方面の諜報は一手に引受けていると云つてよい茶屋であつた。

すつかり商人ぶりは板について、その眼も以前の鋭さから、いかにも裕福な長者らしい風貌に変つている。

手代と見せた護衛二人を連れて、橋の中央にかかると、彼は足をとめて流れを見やり、それから行手に深緑をかざした岡崎城を仰いだ。

「どうじゃ、こゝは、別天地の感ではないか」

「はい。戦のあるとなひとは、吹く風の匂いが違

いまするな」

「しかし、こんどはどうなるかのう」

「どうなるかとおつしやると、こつちも火の粉がふりかゝると云われますので」

「お館さまは、さほどではないが……何分、三河には頑固者が揃うて居るで」

茶屋四郎次郎はそう云うと、陽かげのない橋の上でわざ／＼草鞋の紐を結び直した。

「すると、北陸のことが片附きますれば、筑前どのの手は、この方面に伸びるとおつしやりまするか」

「そうなるうのう、もはや、岐阜の運命も決つたゆえ、天下の平定となれば、徳川家だけをそのままにはしておけまいでなあ」

「そうなつたら、なるほど一大事でござりまするなあ」

「一大事などという段ではない。お館さまの上に生涯でいちばん大きなさわりにならう。さ、急ご

うか」

「はい。この岡崎の城にはお寄りなされませぬので」

「それがのう」

歩き出して振返つて、

「寄らずにそのまゝ浜松へ行く氣であつたが氣が變つた」

「氣が變つたとはお寄りなされますので」

「寄らずばなるまい。いま、この城の城代は石川伯耆守数正どの、石川どのと、密談せずに通りすぎてはならぬ氣がする」

手代はそれで黙つたが、茶屋はまたひとり言うように、

「とにかく、北の庄の城はおち、北陸の備えは一新した。こゝでお館さまに、戦勝祝いの使者を出して頂かねば、筑前どのとの後のもつれが増そうでな……」

四郎次郎は、それ等のことを家康に報告、献策

のため浜松に赴く途中であつたが、道々考えてみると、三河武士の中に、秀吉と対談して、面目も傷つけず、感情も害さぬような外交手腕のある者が思い当らなかつた。

武骨一辺で、秀吉を成上り者と軽んじたのでは、それこそ後が大変だつたし、逆に秀吉にまるめられる可能性も充分あつた。

秀吉はその点摩訶不思議な力を持つた大天才なのだ。

相手がひどく素朴だと見てとつたら、恐らくその肩を叩いて一度で自分の味方にしてしまふに違いない。

(これはやはり石川どのでなければ勤まるまいが、さておきき入れなさるかどうか……)

茶屋はまつすぐ城へ向いながら、しきりにそれを考えていた。

岡崎城も以前の構えから見ると、すっかり変わった。家康自身の功業と歩速を合せて、城廓も櫓も立派になつたし、それを囲む樹木の繁りも加わつて、どつしりとした重さを加えている。

石垣も濠も、三代続いた苦闘と繁栄の秘密を空に囁きかけている。

と云つて、ついこの間落ちた北の庄の城に比べては櫓も低く、敷地も狭いのだが……

「城ではない……そこに住もう人の心だ」

茶屋四郎次郎は、額の汗を拭きながら、勝手に知つた連尺木戸へすゝんでいつて、

「京の呉服御用を勤めます茶屋四郎次郎でございますが、ご城代さまに……」

と、いんぎんに申入れた。

「なに、京の呉服商だと」

門番は四郎次郎の顔を知らなかつたと見えて、「いつたい何の用なのだ。御城代さまは忙しいぞ」

「はい、浜松のお館さまのもとへ参向致します途中、ちよつとご挨拶にまかり出ましたので」

「取次げば、会うと思うのだなご城代が」

「はい。たぶんお許し下さると存じまする」

「よし、無駄でないと分れば取次ぐ」

茶屋は手代を振返つて苦笑した。

万事がこの調子なのである。素朴で失礼で、そしてどこかに愛嬌もあるのだが、物云う時には囁みつきそうな語勢である。

三河気質……とても云おうか。これが足輕小者にまで滲透しているので、戦となれば素晴しく強いのだが、さて、平時のかけ引き、社交となるとちよつと困りものであつた。

以前、信長のもとへ使した、酒井忠次と大久保忠世の兩人が、ついに家康の嫡子信康を窮地に陥れた前例もある。

ところが、こんどは信長よりも遙かにむずかしい相手の秀吉と、とにかく接触しなければならな

いことになったのだ……

茶屋四郎次郎は、木戸口に立たされたまゝ暫く待った。門のすぐ中には供待ちも対面所もあるのだから、そこで待たせて呉れたら助かるのだが、そんな融通はききそうもない。

「茶屋どの、通らつしやい」

「はい。ご城代さまはお会い下さりまするか」

「商人」

「はい」

「その方は、ご城代とは古いつきあいか」

「はい。もうかなり古くから」

「そうらしい。丁寧に案内せよと仰せられた。来

いッ」

四郎次郎はまた苦笑して、

「では、二人の手代は、この供待ちで」

「なに、そうか。まだ二人居たか。よし、神妙に控えて居れ。その方たちのことは訊くのを忘れた」

「かしこまりましたござりまする」

手代を供待ちに待たせて本丸へ中門をくゞつてゆくと、大玄関へ、若侍二人が出て来て迎えて呉れた。

「茶屋どのか、こつちへ通らつしやい」

これも、門番と同じ口調で、案内された茶屋が商人姿なのでムツとしている様子だった。

たずねる石川数正は、本丸の小書院で、しきりに祐筆と何か話しているところだったが、四郎次郎の姿を見ると、

「おゝこれは松本氏、さ、ずつとこれへ」

云いながら、祐筆と若侍に退るように眼顔で知らせた。

三

茶屋四郎次郎は祐筆と若侍が退出してゆくまで敷居ぎわで神妙に頭を下げていた。

家康よりも三ツ年長の石川数正は、この時すで

に四十五歳になつてゐる。

十歳で家康の傍小姓にあげられ、長い間ともに人質暮らしを續けて来て、家康の長子信康を三河へ迎え取る時にはわざ／＼同じ馬に乗せて引取つて来た功臣だつた。

それだけに三河武士の中では圭角がとれ、風貌にも物腰にも円熟した重厚さがにじみ出ている。

「松本氏、北国のことは、到頭きまりがついたようでごさるな」

「はい。万事が筑前どのの、方寸の通りになつてゆきました」

「さ、ずつとこれへ。誰も聞いて居る者はない。

こなたの考えを聞かせて下され。北国は誰に任せられましたかの、筑前どのの……」

茶屋四郎次郎は、ゆつくりと数正の前にすゝんで、もう一度噴き出てくる汗を拭つた。

「実は、お館さまに、とりあえずと思うて、罷り出しましたが、お館さまには浜松にご在城でござり

ましようなあ」

「されば、もはや甲斐からお戻りなされている筈でござる。あの国の国制を定められてな。しかし、またこの秋には甲斐から駿河と、ご自分で廻られるおつもりらしいが」

「ご熱心なことだ」

「まことに、われ等もつく／＼感嘆致して居ります。筑前どのが城攻めなされている間に、こつちはすつかり地固めせねばと仰せられてなあ」

「その事でござります。地固めについては、この茶屋など、何の不安も覚えませぬが、それから先の事がちと……」

「と、云われると、筑前どのに、何か変つた気配でもあると云わつしやるか」

「いゝえ、北国のことはこんど、越前と加賀の内、能美、江沼の二郡をさいて丹羽長秀に下され、本領の若狭と共に治めさせ、加賀のうち石川、河北の二郡は前田利家に能登と共に与えられ……」

「待つて下され。越前は丹羽長秀に」

「はい。加賀、能登は凡そ前田父子でござりまする。父の利家は能登の七尾から金沢へ移つて築城致しましょう。又利長は府中より加賀の松任へ、七尾には前田安勝、長連龍などを置き、佐々成政は越中の富山へおいて上杉家の交渉に当らせて居りまする」

「ふーん。ひどく前田領は多くなつた。それで佐久間玄蕃はどうなりましたな。戦の最中に行衛知れずになつたとか聞いたが……」

「それが、途中で捕まりました。玄蕃も権六郎もな……はじめはしきりに降伏をすゝめたらしいが、玄蕃は頑強にこれを突つたね、わざ／＼京へ連行されて引廻しの上、首をはねられました」

「ふーん。それでは柴田の人類は根絶したか」

「みな／＼意地にこだわつて、少しく思慮が足らなんだ……と、より申しようがござりませぬ」

「して、このあとは、どう動くとか覧なさる」

「これで信孝さまも終り……この次は、大坂築城ではあるまいかと存じまする。天下は、この秀吉が握つたぞと、故右府さまの安土の築城、あれになぞらえて、天下の諸侯に賦課を命ずる……となりますると、ご当家にもかゝり無いことではござりませぬぞ」

四郎次郎はそう云つてじつと数正を見詰めてゆく……

四

数正はゆつくりと頷いた。

戦が済めば、徳川家からもうれ戦勝祝いの使者は出さなければなるまい。

(その使者を誰にするか?)

それは茶屋だけではなく、数正にとつても関心のあることであつた。

「ご城代さま」茶屋四郎次郎は、ちよつとあたりを見回すようにして、

「こんどのお使い、誰が宜しゆうござりますしような。筑前どののもとへ遣わされるお方は？」

「使いは誰でもよい筈じやが……」

と、数正は相手の視線をそらすようにして、
「そのあとでうるさい事になろうも知れぬの」

「そのあとで……？」

「さよう、筑前どののは、必ず何か口実を設けてお館に、自分のもとまで伺候するよう計らえと、その使者に仰せられようでな」

「そのこととござりまする」

と、こんどは茶屋が身をのり出した。彼の案じているのも、それから先のことであつた。

「万一、ご使者が、それを止むないことに考えて、お請けして戻られたらどうなりませうかご城代」

数正は、ゆるく首を左右に振つた。

「お館はとにかく、老臣どもが承知すまい。使者は戻つて切腹ものじやな」

「切腹と分つては行く方がござりますすまい」

「まず無いであらうの」

「とゆうて、わざ／＼筑前どのの許迄お祝いに赴き、向うが来いと云われるのに、その儀は……と、お断りも出来かねませうかと」

「それは出来る」

と、数正は、陽焼けた頬に皮肉な笑みをうかべて、

「それは出来るが、にべもなく断つて来る程なら、相手の感情を傷う点で、始めからお祝いなどに行かぬがよかつたという結果にならうの」

「そうなつたのでは話になりませぬが……」

茶屋も思わず眉を寄せて苦笑した。

「相手はそれで、捨置くお方ではござりませぬので……」

「されば、その点でのう……」

「ご城代さま！」

「妙案があるかな松本氏に」

「いゝえ、妙案などのあろう筈はござりませぬ。

が、これは、お祝いの使者も出さずに済むことではないように考えまするので……」

「わしもそれは、同じことじや。が、さて、誰が使者に行くかとなると……」

「この茶屋は、なみの者では済まぬ。お館さまに若し、誰がよからうかと訊ねられた時には……」

そこまで云うと数正はギロリと鋭く四郎次郎を見返して、

「何者の名を挙げてお答えなさる氣じや」

「はい……」ちよつと息をつめて右手を出して指をくり、

「井伊どの、榊原どのでは、まだ若すぎて、筑前どのがご不満でござりましょうし」

「それで……」

「本多どのでは、ちとはげしすぎまするし……酒井、大久保さまでは、この前の信康さまのこともあるゆゑ、お引請けはなされますまいし」

「それで……」

「私は、やはり、あなた様と、本多作左どのの名より他に、挙げるお方がござりませぬ」

四郎次郎はそこで又、相手の肚を見透そうとしてじつと息をこらしていつた。

五

石川数正は、黙つて庭先を見やつたまゝ、暫く答えようとしなかつた。

その様子が、ひどく手応えのない感じなので、茶屋四郎次郎は言葉をつづけた。

「この事は若い方々には分りますまい。いや、老臣衆の中にも、筑前どのの氣性を誤りなく読みとつて居られる人は稀れかと存じます。筑前どの、何時のころからか、ご自分を天下平定のために生れ来つた太陽のお子と確信されてござりまする。この確信はおそろしい……筑前どのの命ずるまゝにならぬ者は、平定のための敵として、必ず